
新しい世界での新しい自分

黒い鸚鵡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新しい世界での新しい自分

【Nコード】

N3805F

【作者名】

黒い鸚鵡

【あらすじ】

目を開けるとそこはみたこともない世界。そこは未知が満ち溢れていた。姿も変わっちゃてもー大変！はてさてこれから先はどうなることやら。

第0話：プロローグ（前書き）

この小説は作者が思いついたことを思いついたまま書いているのです！この作品が初投稿なので批評は勘弁願いたいですがアドバイス等は歓迎です。不快な思いをさせてしまったら申し訳ないですが、なにとぞよろしくお願いします。

第0話：プロローグ

その世界は魔の力に満ちていた。

その世界は様々な動植物が生息していた…

魔の力に魅了されたモノは《魔族》と呼ばた…

そして…魔族に対抗するかのように魔の力を宿した人間達がいた…

魔族と人間たちの生命の存続をかけた戦いは永きに亘っていた…

その世界には神と呼ばれる存在がいた…

神は永き時を経て忘れ去られようとしていた…

神の持つ力は強大で時空をも超えると謳われてれていた…

何時からか続く魔と人との争いを神は愁えた…

神はこの世界を救うことのできるモノを招こうとしていた…

そのモノをこの世界に招くときこの物語は動き出す。

第0話：プロローグ（後書き）

一応この小説には魔法、学園、TS（性転換）まあX指定じゃないですが…、といろんなジャンルを取り入れて逝きたいと思っています。

第1話・森の中にて…（前書き）

やっと始まりました。

第1話：森の中にて…

「ん…」

そこは森の中…湖のそばに横たわっているカゲがある。

「んあ…ああ…」

お…ただ寝ていただけなのか眼が覚めたようだ。

ん…ああ僕は神《作者》まあこの世界を形作っているものと思ってもらっていい。まあそこで寝ている奴が起きるまでのつなぎだと思っ
てくれ。

「ふあゝあ…よく寝たよ。感覚的には3日間くらいかなあ。」

をいっ！寝すぎだろお前っ！…とと自重しなきゃ皆さんに嫌われて
しまう…そこっ離れていかないで！自重するからあ！

「んあ…ここはどこだ？」

そうこうしてる間にきちんと眼が覚めたようだ。ココからは彼の視
点でお送りしよう。

「ああよく寝たなあ…つかココどこよ！俺は家で寝たはずなのに
何で森の中なんかにいるんだ？」

きよろきよろとあたりを見回してみると木々が生い茂り、葉が重なり
合った天井の隙間から溢れて来る木漏れ日が気持ちいい…そばに
は澄んだ水が美しい湖がある、魚の泳ぐ影も見られ、対岸には鹿の
ような動物が水をおいしそうに飲んでいる。

「っと周囲の様子を確認するのはこれぐらいにしろくか…喉が渴い
たその水でも飲んでみようかなあ、動物が飲んでるんだからまあ
大丈夫だろう。」

そうして眼をこすりなら水際まで行き水を飲む。

しばらく水を飲んで満足したのか湖のそばにしゃがみこむと一息つ
いた。

「ああうまい水だった都会じゃこんなうまい水なんて買わないと

飲めないんだよなあ。」

彼はどうかやら都会に住んでいたようだがのんびりしているのか馬鹿なのかマイペースなのか自分がいまいる場所を理解していないようだ。

「そういえばココどこなんだろう…少し周りの様子でも見てみるか。」

「そういつと彼は森のほうへ行こうと立ち上がろうとした。」

第1話：森の中にて…（後書き）

まだ1話目なんでこれからを期待してやってください
感想アドバイス等お待ちしております。

第2話：異変（前書き）

まだ物語としては進みません。

第2話：異変

立ち上がろうとした瞬間急によるめき苦しうに膝を突いた。

「ぐあっ！つく、な…んだ頭が割れそうだ…な…っなんだ！？」

耐え切れなくなったのか前のめりに倒れていく。

苦しうに胸を掻き毟り荒く息をつくが一向に治まる気配が見えずそのまま気を失った。

しばらくすると異変がはじまり彼から湯気が立ち上り始める。

数分後湯気は強くなっており彼の姿が見えなくなってしまうていた。湯気の中では彼の髪が抜け生え変わり、体から骨がきしむような音が聞こえ始める。

少しずつ体格が変化してゆき皮膚がはがれその下から新しい皮膚が見え始めていた。

湯気がなくなるころ彼が目を開き始めていた。

「ん…くっ…なんだっただ…くそ体がびしょびしょじゃないか、目がかすんでよく見えないし…」

そういつて彼は湖に向けて這って移動していく。

少しして湖にたどり着くと水を掬い顔を洗う。しばらくすると目がしっかりと見え始め湖に目を向けるとそこには…

「な…なんじゃこりゃああ…！？」

彼が湖に目を向けた先で映っていたものはなぜか数倍かつこよくなりそして痩せていた自分の姿であった。

彼は自分の体におこった異変を観察してみた。

すると驚くことに背丈は1尺…てこれは古すぎるか…気を取り直して背丈は180cmとちょっと細いながらもガッチリと引き締まっております、戦いに特化していることが分かる。腰まで伸びた艶やかな絹のような黒髪、黒曜石のようないまにも切れそうに鋭いが黒水晶

のように世の総てを見透かすかのような黒瞳。

極めつけは一目見ると傾国させてしまいそんな美女のよう微笑むと雰囲気ガラリと変わり純真無垢な少女のようにも見えてしまいそんな顔、要するに筆舌尽くしがたい美麗な顔がそこにあった。

しかし彼は驚きのあまり魂があつちの世界に逝ってしまっていてソコまで観察する余裕がなかった。

第2話：異変（後書き）

異変はどうだったでしょうか。表現力がいまいちでしたかね？次回
は回想入ります。

第3話：回想（前書き）

やっと主人公の名前が出てきます。新キャラクターも登場です。

第3話：回想

自分の変わってしまった姿を見た彼は呆然としそして意識があつちの世界に飛んでしまっていた。

く回想く

「おはよ〜つす。」

その日、彼はいつもと同じように大学の講義に出ていた。

「おはよう、今日も眠たそうだね鷗弥^{オウヤ}」

友達^{カナデ}の一人である奏が挨拶を返してきた。

この時点でまだ彼こと鷗弥は不摂生が現れたかのような艶のない黒髪、死んだ魚のような生気の抜けた茶色がかつた黒目、そして極めつけは100キロにも届こうかというような恰幅のよいといえは聞こえはいいが、まあ要するにデブだったのである。

「まあしかたねえじゃんかよう奏よう、バイトしてて寝てねえんだよ!? 寝みいんだよ!」

とまあ徹夜明けによくあるわけのわからないテンションでさげんだ。

「あ〜それはご苦労様だったね鷗弥。また講義中は寝てるんでしょ?」

と普通に返す一見すれば女の子にも見えそうな中世的な顔立ちをしたが言った。

周りからしてみればなぜこんなにもでこぼこな二人が友達なのかなぞなのであるが、本人たちもわかっていないのでこれは永遠に謎である。

「ああ、またノート、コピらせててくれな。」

と今にも寝そうに奏の隣に座る鷗弥。

「わかってるよ。でも少しは起きてる努力しなよ。」

寝ようとしていた鷗弥に声をかけるが、鷗弥は手を振るだけで結局

寝てしまった。

「ああゝあ、寝ちゃった。仕方ないなあゝ。」

とやさしそうな笑顔で微笑みながらその様子を見守る奏。

そしてひそかに奏をみていた女の子たちは胸をキュンとさせるのであった。

さてそうこうして眠りについた鷗弥だったがおかしい夢を見ていた。
「何だココ？まっくらだな。」

辺りを見回すとすべてを飲み込んでしまいそうな闇がどこまでも続いていた。

「なんかこつも真っ暗だとなんか出そうだ。」

すると突然鷗弥を囲むように光の玉が現れた。

「つぎやー！？なんかでたー！？」

光の玉は鷗弥を囲むように廻り始めた。

「戦士よ……」

「勇者よ……」

「救い主よ……」

「われらの希望よ……」

「どうか……」

「われらの世界を……」

「救ってくれ……」

「争いを……」

「止めてくれ……」

周りを廻る光の玉から鷗弥の頭に囁くような声が聞こえた。

「いやいや！？何で俺！？もっとよくみてから言ってくらはい！？俺デブっすヨ！？うだつのあがないアルバイトしかすることのない、運動神経もまるでないデブっすよ！？」

と自分をどこまでも卑下する鷗弥。

「どうか……」

「われらの世界を…」

「救ってくれ…」

「争いを…」

「止めてくれ…」

反応もなく周りを廻り続ける光の玉。

「いやいや聞けって!？」

すると

「お…お…や…：…おう…：や…：鷗弥!」いきなり名前を呼ばれて目が覚める鷗弥。

「大丈夫? うなされてたよ? 鷗弥?」

隣に座っていた奏がうなされていた鷗弥を心配してゆすり起こしたのであった。

「ん…ああ奏か。ありがとう、危ないところだったもう少しであっちの世界に連れていかれるところだったよ。」

額に浮かんだ汗をぬぐいながら言う鷗弥。

「あ、あっちの世界? そんな、鷗弥が居なくなったら僕は悲しいよ。」と的はずれなことを言う奏。聞きようによつては危ない発言だ。

「とにかく助かった。それにしても今何時だ?」変なことを言う奏を訝しげな目でみながら訊ねる。

「ちっ、ちょうど最後の講議が終わったところだよ。」

鷗弥の訝しげな視線に焦りながら顔を赤らめつつ言う奏。その奏を見て乙女たちが胸キュンしたのは言うまでもあるまい。

「そっ、そうか。今日はバイト入って無いしそのまま帰るかな。」

奏の赤くなった顔を見て何故かドキツとした鷗弥は苦し紛れに話を反らした。

「じゃ、じゃあ一緒に帰ろうよ。寄りたいところもあるしね。」

「ん…ああいいぞどうせ本屋だろ。」

奏と別れて家路についた鷗弥は日頃の疲れか夕飯も食べずに眠りに

ついた。

「戦士よ……」

「勇者よ……」

「救い主よ……」

「われらの希望よ……」

「どうか……」

「われらの世界を……」

「救ってくれ……」

「争いを……」

「止めてくれ……」

再び暗闇の中に放り込まれた鷗弥はまたへんな光の玉に取り囲まれていた。

「ぎゃああー！？って2回目はそうそう驚かネエって。」

驚かないと言いつつ驚いているバカな鷗弥。

しばらく光の玉に囲まれ囁きを無視していると、光の玉の向こうから輝いてはいるがどこか弱々しい輝きを纏う人影が現れた。

「選ばれし我らが救い主よ。争いの続く我等の世界をどうか救ってください。」

人影ははつきり見えるところまで来ると懇願した。しかし鷗弥はと言うと……

「キター！きれいなオネーさんキター！」

狂っていた。

「私は争いの続く世界、仮にソルシエント、と呼びましょう。そのソルシエントを形創りし神の一柱大地の女神フィーリアと申します。」

突然語り出す女神フィーリア。

「いま私たちの世界では魔に魅了されし魔族とそれに対抗する人間たちが互いの存亡を賭けとても永い時を争っています。ですがその永い争いのせいで世界に限界が近づいています。このまま行くと遠

くない未来に終わりが訪れてしまいます。」フィーリアは語り出したが鷗弥は…

「女神キター！スッゴい綺麗だ…はあはあどうしよう、もう鼻血もんだよ！」

まだやっていた。どうしようってもうどうしよう もないなお前。

鷗弥の様子に気づいたフィーリアは鷗弥の周りを廻っている光の玉とはまた別な光の玉を造り出すと鷗弥にむかつて投げつけた！

「もうっ！ちゃんと聞いてください！」

フィーリアはそう言うのと頬をリスの様に膨らませてプリプリと怒った。

「ごっつ、ごべん、な、ばい。」

と鼻血の出た鼻を押さえた鷗弥が言った。

「貴方は私たちの世界の救い主として選ばれました。因みに拒否権は在りません。」

怒ったフィーリアは問答無用で話を進めていく。

「これから貴方には幾つかの力と能力をあたえます。」

そう言うときフィーリアは鷗弥の周りにあった光の玉を鷗弥に向かって物凄い速さで飛ばした。

「うええっ！？なんか来たのに体が動かんよ！？」

すると光の玉は鷗弥に当たると溶け込むかの様に鷗弥の中に消えて行く。「あつ、因みにそれ当たると物凄く痛いので頑張ってくださいね。」

先程の恨みか物凄くイイ笑顔でのたまうフィーリア。

「そつそれを早く言え！つぎいやあ！」

早く言ったって動けなきゃ意味無いのにね。

そんなこんなで全部入る頃には息も絶え絶えな鷗弥。

「うっ…はあはあもう駄目ギブ…」

そんな鷗弥に鬼畜フィーリアは止めを指す。

「それじゃあ最後にでっかいの逝くから。頑張ってくださいね。」
何故か嬉しげに言うフィーリアは特大の光の玉を造り出すと鷗弥に

むかつて投げつけた。

「やつやめ…いいやあゝ！」

光の玉が消えたときソコには鷗弥の姿はもうなかった。

「クスッ…予想以上だったな。あの子ならやってくれるかも。何か予想外なモノも持ってたさね。」

そう言って女神フリーリアは現れたときの弱々しい雰囲気을消し去りただただ嬉しげに消えていった。

その頃奏の家では…

「はっ、鷗弥のピンチ！」

奏が一人神の啓示《電波》を受けていたとかいないとか。

第3話：回想（後書き）

やっぱり力不足デシタかね？ネタが切れるまでは更新ペースはこんな感じでいくと思います。

第4話：狼と妖精（前書き）

長いです申し訳ない。

第4話：狼と妖精

話は戻って意識があつちの世界に飛んでいた鷗弥は漸く意識が正常に戻り始めていた。

「っはあはあ…死んだジーちゃんたちが手招きしてたよ…それにしてもまったくこの姿は何なんだ。」

そうつって湖に映る変わり果てた自分の姿をもう一度見る。

「大体異世界召喚とかいうのはもつとほかにかっこよくて何でもできてみたいな万能な奴がやるべきだろ。絶対に俺みたいにデブで取柄のない奴がやるもんじゃねえって…まあ今はすっかり変わっちゃまってデブではなくなつたみたいだけどな。」

そうついいながら立ち上がり周りを見渡す。すると森の中から悲鳴が聞こえてきた。

「うややあゝ！こつ…こないで！」

「なんだ！つく！いったい何事だ！」

といいながら声のしたほうへ走っていく鷗弥。

「こないで！だれかつだれか助けて！」

だんだん声が近くなり。とうとう声の元にたどり着いた。

「Grurururuaゝ！！」

「うややあゝ！」

そこにはなんと！

羽の生えた小さな人型の妖精のようなモノが真っ黒な口から煙を吐いている狼のような動物に食べられそうになっていた。

鷗弥は何も考えずに咄嗟にそばに落ちていた拳大の石を拾い上げると狼に向かって投げつけた。

（うげっ！やつちまったくこの後どうするか考えてねえゝのにい）
すると放たれた石は投げた本人である鷗弥の予想外のスピードで飛

んでいき狼の横つ腹にもものすごい音を立ててぶつかった。

ドゴォッ！！！！

（うええ！？何であんなスピードで！？あんなに力なかったはずなのに！？）

ちなみに鷗弥の肩では野球の一塁からホームに投げ返すのがやつたのであるが、今の石はプロゴルフがドライバーで打ったとき以上のスピードがあつた。

そんなものが当たつたら普通の生き物は無事ではいられないだろう。しかし狼はというと石ぶつけられたためか敵と見做しただろうこちらに顔を向け黒い煙を吐き唸っていた。

「G r u r u r u a s ! ! ! ! !」

「いやっ！ちよっ！まず落ち着こう！なっ！」

などと自分から仕掛けたわりに腰の低い態度で通じるわけもないのに必死になだめようとしていた。

「Gruaaaaa~!!!!」

ボ
オ
ウ
ツ
！
！
！

いきなり口から炎を吐き出してきた。

「うわあっちゃん！」

炎を避けようとして横に跳んだ鷗弥だったがなぜか跳びすぎて1 mほど横にあった木に激突していた。

「うぎゃ！いつててて！何なんだいったい！？ありえないだろこ
の跳びようは！」

と自分に対して突っ込んでいる鴎弥。

とそーじに、

「氣を付けてください！そのイヌ畜生はヘルハウンドという《魔獣》の一種です！」

先ほど襲われていた妖精から声が飛んできた。

「まっ、まじゅううゝ!? 何でそんなもんがいるんだゝ!」

鷗弥は聞いたこともない単語を耳にして慌てているところから軽いパニックに陥っていた。

「そいつは狼のような素早さと炎を吐くという固有能力を持っています! ただあなたのさっきの跳躍を見る限り攻撃は当たらないと思います! 炎だけは当たらないように気をつけてください!」

と妖精が言ってくるも、

「なん! そいつの炎で負った傷は治癒魔法でしか治りません! 僕は火傷を治す治癒魔法は使えないので治しようがありませんから!」
「でえ。」

鷗弥が何故かを問おうとするところに思いつきり被せてきた。

鷗弥が余所見をして妖精のほうを向こうとしたそのとき、

「Gruaaa!」

「うつ…うわあ!」

突然飛び掛ってきたヘルハウンドによって余所見をしていた鷗弥は地面に組み伏せられてしまった。

「だっ大丈夫ですか!」

妖精は心配しつつもヘルハウンドが怖くて岩の陰から鷗弥を心配そうに見ていた。

そのとき突然 プチンッ! と何かが切れたような音が聞こえてきた。

「どいつ《ファイリア》もこいつ《妖精》勝手なことばかりぬかしやがって! しまいにやなんだ! 今度は魔獣とか言うわけのわからねえ奴と戦えだ!? 好き勝手なことばかりぬかしてるとしまいにやぶちきれんぞ! モルアー!!!」

鷗弥の炫きが終わった瞬間鷗弥を中心に衝撃波のようなモノが飛び出し、ヘルハウンドを吹っ飛ばした。

「Gruu!」

ヘルハウンドはいきなりすることに驚きつつも自分の獲物から目を離さなかった。

「……ブツブツ……」

俯きながら何かぶつぶつ言っている鷗弥に向かってヘルハウンドがもう一度飛び掛ろうとしたとき、

「ああっ!？」

と鷗弥がガンをつけた瞬間ヘルハウンドは衝撃波に吹っ飛ばされ近くの木にぶつかり伸びてしまった。

ヘルハウンドを見事？倒した鷗弥だったがいきなり倒れてしまう。

「だっ、大丈夫ですか!？」

と声をかけてくる妖精の姿を最後に鷗弥の意識は途切れてしまったのだった。

第4話：狼と妖精（後書き）

戦闘シーンにしては表現へただったような…
見限らずに生暖かく見守ってやってください。
感想等お待ちしております。

第5話・再会（前書き）

これから少しずつ長くなっていくかもしれません。

第5話：再会

ヘルハウンドを倒した鷗弥だったがまだ気絶から覚めずにいた。

「よいしょ…よいしょ…」

妖精が一生懸命何かを運んでいる。

「よいしょ…っと。ふうふう疲れちゃったよ。それにしてもココは
いったい何処なんだろう？」

道に迷っているのか、それにしてもはしつかり前を見据えて何かを運
んでいるが。

「よし、あと少しだ頑張ろう。あゝあ体が大きかったらこんなに大
変じゃなかったはずなのになあ。」

妖精なのだから体は小さくて当たり前はずなのだが、ブチブチと
愚痴を言いながら残りの距離を運んでいた。

「ふうやつと着いたよ。羽のお陰で飛べるとはいえ、水がこんなに
も重いものだったなんて。」

妖精が運んでいたモノは水だったようだがいったい何に使うのだろ
うか？

「起きて…起きて下さいよう…」

小さい体を精一杯使って気絶した鷗弥を起こそうとしているが鷗弥
はそのようなことではびくともせず意識が覚醒する気配は微塵もな
い。

「んもう全然起きてくれないよ。体が小さいせいじゃなく力がな
いし…もうこうなったらせつかく運んできた水でも顔にかけるか…そ
うだ！そんな勿体無いことしなくても…！」

妖精が小さく何かを呟くと突然妖精の周りに蒼白い閃光が瞬き始め
た。

「よしこれなら！風系統雷魔法静電気療法！」
シルフィーデナイトニングエレクトリックキュア

そう言うのと妖精は鷗弥に向かって魔法を使った。

「ぴぎゃあゝ!?」

鷗弥の身体に電気が通り時折骨が透けて見える。

「あっ…しまった! 威力を間違っちゃった!…テヘツ医療も行き過ぎると身体に悪いってね!」

可愛くいつているが態とだろっ鬱憤を晴らすために鷗弥に八つ当たりをしたのだった。

実に鬼畜である。

「テヘツじゃねえ! をいつ! 今ので一瞬お花畑が見えたじゃねえか!」
「あ、そうだ水飲みます?」

ツツコミを見事にスルーした妖精は話をそらした。

「ん? ああ悪いな。んくつくんくつ! ぷはあ! それよりいつたいあれはなんだつたんだ?」

鷗弥は貰った水をのみ干すと妖精に尋ねた。

「あつあの時はどうもありがとうございました。もう少しで食べられちゃうところでした。えーと…」

「ああそういえばまだ名乗ってなかったな。俺の名前は九重鷗弥、このえおう「えっ鷗弥なのっ!」やって…」

名乗った途端にまたかぶせてくる妖精。

「確かに鷗弥だけどさ、俺にこんなちっこい知り合いはいないぞ?」

「僕だよ! 奏だよ!」

「ナニいつてんだおまえ奏がこんなに小さい分けねえだろ!」

「それがさあ聞いてよ鷗弥!」

〈奏の回想〉

「ふう、どこ行っちゃったんだろっ鷗弥…もう一週間も探しているのに手がかりひとつないなんて…」

ベッドの上に横たわりながら憔悴したようにつぶやく。

疲れていたのかそのうち深い眠りについてしまった。

「夢の中」

「起きなさい…奏…」

暗闇に囲まれた空間に女神フィーリアが立っていた。

「ん…ふあ…」

何もなかった場所に突然奏が眠そうに目をこすりながら現れた。

「目が覚めましたか奏。私は女神フィーリアと申します。いま私たちの世界に危機が迫っています。そのため九重鴉弥はその危機を救うため私たちの世界に送り込まれました。」

突然話しかけてきたフィーリアの言葉に驚いた奏はフィーリアに詰め寄り問いかけた。

「鴉弥は無事なの！ねえ！なんで鴉弥がそんなことに！」

「彼は無事です。しかし彼は向こうの世界に着きましたがいまだ目覚めていません。彼一人ではかの世界に迫る未曾有の危機に対抗するには危険すぎます。そのため貴方には彼より少し前の時間に行ってもらい彼を手助けしてもらいたいです。しかしそのためには貴方のその身体では世界を渡る衝撃に耐え切れません。貴方に世界を渡る覚悟がありますか？」

フィーリアは今の状況を説明し協力を得ようとする。

「当たり前じゃないか！愛する《…》鴉弥が独りそんな目に遭っているのに僕がじつとしていられるわけがない！！」

奏の危ない発言に引きつつも奏の覚悟を確かめたフィーリア。

「わかりました、それだけの覚悟があるのなら貴方には彼の助けになってもらうため、世界を渡ってもらいます。しかし、先ほども言ったように貴方のその身体では世界を渡る衝撃に耐え切れません。そのため貴方にはあちらに行くために転生してもらいます。」

「っ！鴉弥は！鴉弥は無事に渡ったんですか！」

自分のことよりも鴉弥の心配をする奏。

「彼は私たちにも計り知れない力を秘めています。しかし彼はあちらの世界に適応するため姿が変わっているかもしれません。」

「そう、姿が…」

「それではあちらに行くために貴方に転生してもらいます。その際多少の痛みを伴うかもしれませんが我慢してください。」

そういつてフィーリアは奏の姿が隠れるほどの大きさの光の玉を作り出すと奏に向かって飛ばした。

「うっ！うわっ！！！」

～回想終わり～

「愛するってお前…前々から怪しいと思っていたけどやっぱりそっちのケが…」

いままでの説明に突っ込む観点が外れている鷗弥は悪寒を感じる自分の身体を抱きしめつつ変なところに突っ込む。

「あ…あはは…ま、まあ鷗弥が無事でよかったよ。結局その後転生した僕は、人間に比較的友好的な魔族である妖精族フェアリーの族長の孫に生まれ変わったんだ。そして鷗弥をサポートするために様々なことを学んだんだ。さっきの鷗弥を起こしたのも魔術のひとつなんだよ。」

この世界にきた後のことを説明しつつ暴露したことを誤魔化すように苦笑いする奏。

「そうだ！お前さっきはよく「あっ！！これから僕が住んでいるところに案内するよ！」

も…」

先ほどの電気ショックについて問い詰めようとした鷗弥の台詞に対してかぶせるように言い放つと小さい身体で一生懸命鷗弥の手を引いて飛んでいこうとする。

「ま、までよっ！おい！おいってば！」

「数時間後」

「おいゝまだつかないのかよお……」

疲れた様子で歩く鷗弥。

「もう少しだから頑張つて！」

鷗弥にあえたからか楽しそうな声で返す奏。

「もう疲れ……な、何だこのでっかい城……!?」

しばらく歩いていると何かが見え始め近づいて行った先にあったものは大きなお城であった。

「ようこそ！ 僕のお家へ！」

「なんだおまえ！ こんなところに住んでいたのか!?」

歓迎して飛び回っている奏を捕まえて問う鷗弥だったが、

「は……な……し……て……さっいまから鷗弥の部屋に案内するよ。」

するりと捕まえていた手のひらから逃げられ先を飛ぶ奏を追いかける羽目となった。

「ふう今日は訳の分からない事ばかりで疲れちゃったよ……」

疲れた様子でキングサイズの無駄に大きいベッドに横になった鷗弥は呟いた。

「明日は一番にあいつにいろいろと詳しく話を聞かねえと……」

呟きながら眠りにつき鷗弥の長かった一日は終わったのであった。

第5話：再会（後書き）

どうだったでしょうか。
感想お待ちしております。

第6話：朝のひと時…（前書き）

遅くなったくせに短くて申し訳ありません。

第6話：朝のひと時…

「ん…」

閉じられたカーテンから朝の日差しが差し込んでくる。

ベッドに広がった長い黒髪に朝日が反射して輝くばかりに光を放っている。東洋の人間に見られる彫りの浅い顔の造りだが、国を傾かせてしまいたいような美貌と相まって、その様子はさながら一枚の絵画のように神秘的な雰囲気醸し出している。

さらに薄い掛け布を素肌の上に掛けただけの細身ながらに引き締まっっているその身体は、横を向いているためスレンダーな女性に見えなくもない。

「じゅるっ、おつと涎が… あああつちの世界にいたときの鷗弥もよかったけどこの姿の鷗弥もなかなか… ああ、見てよこの寝顔。穢れを知らない無垢な少女のようでいて、さながら無意識に男を誘惑しているかのような妖艶な美女のようにも見えてしまう… ああ鷗弥… 君はなんて罪深いんだ…」 鷗弥の周りを飛び回っている奏は鷗弥の様子に興奮したように涎をたらしながら詩のように呟いている。

「ん… ふあーあ…」

どうやら目が覚めたようだ。

仰向きになり眼を擦りながら瞼を開けるとそこには！

「うつ、うわあー！」

「うひゃあ！」

顔の前で羽ばたいていた奏に驚いた鷗弥が大声をあげると、それに驚いた奏がさらに驚く、まさに悪循環である。

「なっ、なんだよおまえ！ 人が寝てるのに目の前にいるんじゃないやねえ！」

「だっ、だって！ 向こうの世界にいたときなら鷗弥の寝顔なんか見られないじゃないか！ …… きれいだったなあ鷗弥の寝顔…、こうな

んていうの？地上に降り立った女神のようで…」

鷗弥の叱責に的外れなことを言い出す。

「おっ！おまつ！キシヨイこと言ってんじゃねえ！眠気が吹き飛んじまったじゃねえか！」

鷗弥は掛布を体に巻きつけて強化された身体能力でベッドから飛び降りると壁際まで後ずさった。

「まあまあ、良いではないか、良いではないか！」

悪代官のようなことを言いつつ逃げた鷗弥を追う奏。「くっくるな！やめっ、やめろー！」

バシッ！

恐怖に駆られた鷗弥は迫っていた奏《脅威》を文字どおり打ち払った。

「ふぎゃー！」

叩き落とされた奏はフラフラと飛び上がると恨みがましい目付きで鷗弥を見た。

「うっつ、ひどいよ鷗弥：痛いじゃないか！」

「おっ、お前が悪いんだろ！ふざけるから！」

「ふざけてなんかないよ！こうなったらあの手を使っちゃうからね！」

自分のしたことを棚にあげ逆ギレすると、いきなり魔法を使い始めた。

ダークネス アシスト

メタモルフォーゼ

「闇系統補助魔法身体操作！」

いきなり奏の居た場所から煙が上がった。

「おまつ！そのすがたは！？」

「へへん！スゴいだろ！魔族しか使えない闇系統のなかでも難しいと言われる肉体作用の魔法なんだ！」

そう言う手のひらサイズから魔法により人間大まで巨大化した奏が自慢げに胸を張る。

「だ、だからその格好を…」

「これで問題なくいちゃつけるね！」

と奏が的はずれなことを言う

「いいから服を着ろー！！！」

朝の森の静寂に鷗弥の叫びが響きわたった。

。

第6話：朝のひと時…（後書き）

作者は主に大学の講義中に執筆しているのであまり筆が進みません。
面白くなかったらごめんなさい。

第7話：これまで、これから

「それで…ココはいつたい何処なんだ？今の俺姿は何なんだ？お前の姿は？あの犬に教われたときのあの力は何なんだ！？」

服を着替えた二人は応接間の様な部屋で差し向かいに座りながら話し合っていた。と言うか一方的に鷗弥が質問を叩きつけていた。

「まあまあ、とりあえず落ち着きなよ。興奮すると体に良くないよ。質問には1つずつちゃんと答えるからさ。」

奏の落ち着き払った態度が余計に鷗弥を煽っている。

「そーだねえ、何からはなそうか…」

この世界は神々の創りし世界…そうもう分かっていると思うけれどこの世界は僕らの居た世界ではないんだ。

この世界には魔の力が満ちていてね、その魔に魅いられたものは魔物となるんだ。

魔物は二種類いてね、魔物の中でも知能が高く人語を介すものを魔族と呼ぶんだ。あとの魔物は普通の動植物が魔に魅いられた魔物と化したモノたちだよ。鷗弥が戦ったヘルハウンドも元々は狼だったかヘルハウンドが子を成して増えた奴だよ。そう魔物は増えるんだ。

近年魔物が急激に増殖していてこの世界は滅亡の危機が迫っているんだ。

鷗弥は女神フィーリアと会ったよね？彼女が言うには鷗弥には力があるらしいんだ…この世界を救うことのできる力がね…たぶんヘルハウンドを倒した時の力はその一部だよ。

人や魔族は魔の力、魔法を使うことができる。それには何種類か方法があるんだけどそれについてはあとでね。

「ふう…まあこんなものかな？」

そう言つて語り終えた奏は紅茶を飲んだ。

「まあ大体の事は理解したがまだ聞いてないことがある。」

聞いたことを理解しようと必死に頭を回転させていた鷗弥はいまの話で触れなかった部分を聞こうとした。

「ああ僕と鷗弥の今の姿のことだね？」

鷗弥のいまの姿はこの世界での鷗弥と言う存在に合った形に変化したんだ。

僕はこの世界へ無事に渡ることが出来るほどの力を持っていないくてこの世界に渡るためにフィーリアが転生させてくれたんだ。転生した先が妖精族のある一族の長の孫でね鷗弥がこの世界に来る数年前でね鷗弥を助けられるように色々勉強したんだ。この屋敷はフィーリアが僕が鷗弥を鍛える為に用意してあつたんだ。

鷗弥はこの世界をどうにかする力を持っているんだ。でもその為にはその力を操れるようにならなければならない。これから鷗弥はこの屋敷でこの世界についての詳しいことを学んでもらい、その体に慣れ力を操る術すべを学んでもらいたいんだ。

「と、まあこんなところかな。」

「ん…まあ一応理解はした…理解はしたんだが今日はもう遅いし明日からでもイイか？聞いたことをアタマんなかで少し整理したいんだ。」

窓の外、暮れる夕日を眩しそうに見詰めながら呟いた。

「わかったよ。それじゃあ明日も朝起こしにいくよ。」

奏がそう言つと鷗弥は自分の部屋に戻りその日は暮れていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3805f/>

新しい世界での新しい自分

2010年10月17日05時49分発行